パリから、日本への直行便に乗った。
窓側の席。ジョーは外を眺めて隣の空席を見ないようにする。
朝になって空港に駆け込んで、一番早い便に空席があったことは運がよかったのだ。それなのに、よりによって隣まで空いているとは。
本当だったら、二人で日本へ向かうはずだった。
フランソワーズは予定通りに着いたのだろうか。

きのう、博士に帰還の報告をしようと日本の研究所へ連絡したとき。
博士は矢継ぎ早にジョーの今の状態を確認しようと質問を投げかけてきた。
とりあえずは身体に問題は起こっていないとわかり、博士は仕事の話から、今の研究所のことについて触れた。
もう仲間たちはほとんど集まっているという。
ジョーが何か言う前から、博士は言った。
あの子はまだそっちにおるんじゃろう？　お前たちで最後じゃよ。今フランスなら、一緒に帰っておいで、と。
そうですね、ジョーは明るくそう言って電話を切った。

フランソワーズとはまだ連絡が取れていないとは、言えない。
あの日、彼女の番号へはとうとう電話できなかった。
今更連絡して、果たして彼女は家にいるのだろうか？
あの約束はもう三日も前の話。
きっと約束を破ったことを怒っているだろう。でも。
祈るように電話をしてみる。誰も出ない。20コール目であきらめて切った。
ジョーは彼女が家にいなかったことにどうしようもなく動揺していた。きっといてくれると思い込んでいた。
そう思うことが彼女への甘えだと思い直す。
このことについては悪いのは一方的に自分だと自覚している分、余計にいたたまれない。
日本が朝になるのを待って、もう一度研究所へ連絡してみた。電話に出たのはアルベルトだった。
「ジョーか？　何？　フランソワーズなら電話があって、予定通りに今夜こっちに着くって言ってたそうだが。何だ、お前達一緒に来るんじゃなかったのか」
「…僕が間に合わなかったんだ」
「そうか」
アルベルトは余計なことは一言も言わなかった。だけど、彼の場合言葉にしないほうがじわじわ伝わってくる気がする。
「僕もすぐ日本に向かうよ」
「そうしろ、皆には伝えておく」

そしてジョーはひとり成田空港へと着いた。年末の空港は午前中でも人でごったがえしている。
自分はたいした荷物のない、気楽な旅行者にでも見えるだろうか。ジョーはそんな風に考えながら暗い表情でのろのろと歩いていった。
時間を見て研究所に連絡を入れる。
ほのかな期待は裏切られ、今度はグレートが電話に出た。
「着いたのか。お前さんが最後だぞ。早く帰って来い」
「うん」
「おっと、我輩が出て悪かったな。お望みの姫君は只今イワンの世話をしててな」
「あ、いや…いいんだよ」
「良かないだろう。電話があったこと、伝えとくからちゃんと話をしろ。じゃあな」
グレートの言葉から察するに、皆例の件については知ってるってことか。
電話を切った後もジョーはしばらくその場でぼんやり考え込む。途端に帰りにくくなったな。
でも帰らないわけには行かない。義務感と罪悪感にさいなまれながら気が重い研究所までの道のりをたどった。

「ただいま」
「思ったより早かったな」
銀髪に色素の薄い瞳、アルベルトの一見冷たそうに見える顔に出迎えられ、ジョーはほっとして荷物を降ろした。
「うん、直行便にキャンセルが出て乗れたんだ。空港からもスムーズに移動できたし。博士は？」
「博士は今出かけてるが、あと一時間もしたら戻る。あいにく皆出払っていて、俺もそろそろ出かけなきゃならん」
「え、そうなんだ」
「悪いがお前が今日帰ってくるとは思ってなくて、予定を入れてしまっててな」
そう、本来の予定では昨日のうちに日本へ着いているはずだったのだ。
「わかった、気にしないで行ってきてよ」